

# 二年間使ってみて見えてきたこと

いよいよ最終回。二年前にデジタル教科書と出会って変わった私の授業について、そして、これからデジタル教科書を活用していくためのポイントや課題をまとめました。



千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。千葉県の公立中学校教諭、千葉大学教育学部附属中学校教諭を経て、現職。共著書に「中学生を作文好きにする！新レンビ60&ワークシート」（明治図書出版）など。

## 1 最終回のご挨拶

おとし、一年生を迎え入れると同時に私のデジタル教科書との「奮闘」もスタートしました。初めは指導者用デジタル教科書を使える環境が、その後、生徒一人一台のタブレット端末で学習者用デジタル教科書を使える環境が整い、私の授業は大きく変わりました。

「デジタル教科書が学習にうまくはまった」と感じることも、「もったいなくすればよかったかなあ」と感じることもありました。二年間使った結論として、デジタル教科書は今の私の授業に「なくてはならないもの」になります。最終回の今回は、これまでの実践を振り返り、私なりのデジタル教科書活用のポイントをとめたいと思います。

## 2 気軽に使える状態にする

デジタル教科書導入の最初の「奮闘」は、毎時間、教室でスムーズに使用できる状態にするということでした。

皆さんの学校では、指導者用デジタル教科書をどうやって提示していますか。プロジェクト？ 電子黒板？ 本校では、各教室につり下げ式のプロジェクトスクリーンがあり、それをパソコンにつないで電源を入れるだけで投影できる環境になっています。電子黒板などを移動する手間はかからないので、かなり楽なほうだと思えますが、それでも準備がいるには違いありません。

やはり、デジタル教科書の普段使いをするための一つのハードルは、十分間の休み時間のうちに、素早くセッティング

## 3 「ハンズオン」や「場面」

授業では、毎時間デジタル教科書を使っていたわけではありません。でも、これまで連載してきたとおり、次に挙げるような資料やツールを「ここぞ！」という場面では必ず使うようになりました。

### ① 魅力的な動画・画像資料

一つ目は、魅力的な動画・画像資料で

す。デジタル教科書にはたくさん動画や画像が収録されています。例えば、教材の書き手が登場する動画があります。「野原はうたう」（二年）では工藤直子さんが詩の朗読を披露しています。これを活用して音読の授業を作りました（本誌81号掲載）。

「君は『最後の晩餐』を知っているか」（二年）では、紙の教科書にも「最後の晩餐」の絵が載っていますが、デジタル教科書には、弟子の名前を確認できる画像があります（図1）。この資料を、最初の学習活動で使うことにしました。「この

絵の中に、キリストを裏切った弟子のユダがいます」と問いかけると、生徒は「誰だろう」と、一気に絵に引き込まれていきました。

そして、この教材にも、筆者が中学生に向けて「なぜ私は『かっこいい』という言葉を使ったと思いますか」と問いかける動画があります（図2）。これを使うことで、「表現の意図や効果」についての学習に、すっと入ることができました。さらにもう一つ、有効に活用できそうなのは「話す・聞く」教材の動画資料です。「話し合って考えを広げよう」（二年

のパネルディスカッションの動画は、「解説あり」（図3）と「解説なし」の二種類が用意されています。授業では、まず解説なしの動画を見て、そこからよい点や課題を指摘させるとよさそうです。

### ② 学習プロセスを丁寧に確認できるツール

もう一つは、学習プロセスを一つ一つ確実に押さえたときに使えるツールで



図1 資料「キリストの弟子たちの名前」

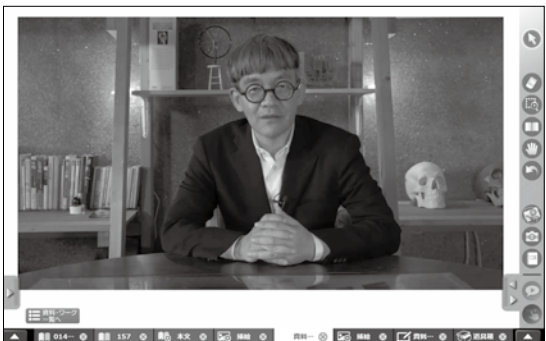


図2 ワーク「布施英利さんからの問いかけ（前編）」



図3 ワーク「【解説あり】パネルディスカッションの例」

す。例えば、要約のしかたを確認したいときは「黒板ツール」の出番です。これを使って、本文中のキーワードを抜き出し、それを取捨選択してまとめるといっプロセスを丁寧に確認できました。

また、文章全体の構成を確認したいときは、全文表示画面で俯瞰しながらまとめごとに色分けして整理します。さらに、「文章の構成を考えよう」というツールで段落の分け方を考えたり、見出しを付けたりする学習ができました(本誌82号掲載)。

古文の音読・暗唱をしたいときには、「原文と現代語訳」「暗唱してみよう」の二つのツールが便利でした。朗読音声を何度も聞き返したり、レベルを変えて暗唱に挑戦したりすることができ、生徒は繰り返し取り組み、音読・暗唱に習熟していきました(本誌84号掲載)。

#### 4 見えてきた 活用のポイント

このように、さまざまな場面でデジタル教科書を使ってみると、しだいにその活用のポイントが見えてきました。

連携させていくことです。それによって、効果を倍増させることができます。

例えば、「平家物語」(二年)の学習では、デジタル教科書を使って音読練習をした後、「ロイノート」というマルチメディア共有アプリを使って、各自の音読を録音するという取り組みをしました。デジタル教科書に録音機能がないなら、他のツールと連携させればいいのです。それができるのがICTのよさです。せっかくパソコンやタブレット端末を使って授業をしているのですから、それを「デジタル教科書専用機」として使うのはもったいないと思います。

デジタル教科書を導入するというときは、同時にパソコンやタブレット端末などのハード、ワードやパワーポイントなどのソフト、インターネットも活用できるといってもあるのです。

#### ③ 選択肢を広げるという意識をもつ

デジタル教科書があれば、紙の教科書はいらなくなるのかといえば、そんなことは決してないはず。私は、デジタル教科書などのICTと「乗り物」はよく似ていると考えています。移動するためには歩いていけますが、車があれば

#### ① 生徒が使い方を工夫していく

一つは、デジタル教科書の使い方を生徒自身がアレンジしていくことです。ここでは学習者用デジタル教科書を想定して述べますが、指導者用デジタル教科書でも考え方は同じです。

デジタル教科書には書き込み機能があります。この書き込み機能を使う際に、「○ページの○行目の……」という言葉は大事だから、ここに線を引きましょう」という使い方をするのであまり意味がありません。それよりは「自分で大切だと思うところにまず線を引いてみましょう。色分けもできるね」と指示をするほうが、生徒の頭はずっと「アクティブ」になります(本誌83号掲載)。

また、「登場人物の関係を整理しよう」や「文章の構成を考えよう」というツールがあります。これらを「このとおりにまとめてごらん」と示すために使うのではなく、生徒が自分なりにアレンジし、工夫しようとするような使い方をしたほうがいいようです(本誌85号掲載)。例えば、「蓬萊の玉の枝——竹取物語から」(二年)では、ツールを使って「五人の貴公子についての動画を見て、五人のランキングを考えよう」という学習を行いました

とても便利です。しかし、車があるから歩くことはなくなるかといえば、そんなことはありません。移動するための「選択肢」が増えたということです。

デジタル教科書やICTが整った教室はまさに「選択肢が豊富な」教室です。早く移動したいときには車を使い、道のりをじっくり味わいたいときには一歩一歩、自分の足で踏みしめる。このような目的に合った移動＝学びが可能になるのが、ICTを活用した教育の特徴です。これからの授業には、多様なツールやICT環境を生かした学習のデザインが求められていくのだと思います。

#### 5 デジタル教科書は、現場が作り上げていくもの

私は、世の中の変化に合わせて、学校も変わっていくべきだと考えています。社会でICTが当たり前に使われている以上、子どもたちの言語活動でも、それが自然に取り入れられていくべきでしょう。だから、百年前と変わらず、紙の教科書だけを使って、「選択肢がたった一つ」の状態にいるのは、残念なことだと思います。諸外国と比較しても、日本の

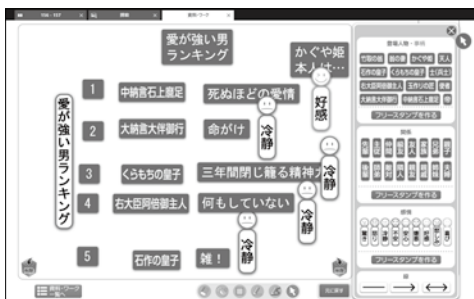


図4 ワーク「登場人物の関係を整理しよう」

た。生徒は自分で自由にオリジナルのスタンプを作り、工夫して自分の考えを表現するようになっていきました(図4)。

子どもたちは、大人よりもずっとICTへの親和性は高いので、使い方を全て一から教える必要はないと考える必要はありません。生徒がユニークな使い方をしていたら、「どうしてそんな工夫をしたの?」と意図を引き出し、他の生徒にもどんなアイデアを広めていくようにしていきました。

#### ② 他のツールと連携させていく

もう一つのポイントは、デジタル教科書を活用する際に、それ以外のツールと連携させていくことです。デジタル教科書を準備するにはちよつと手間がかかります。使ってみて、足りない要素も見つかるといでしょう。しかし、社会でICTが使われているのと同じくらい……とまではいなくても、少しずつでも教室に取り入れて、新しい風を入れていくことは、私たちよりも、この先の未来を生きていく子どもたちにとって必要なことではないでしょうか。

デジタル教科書の導入について、どの学校もまだ手探りの状態だと思えます。よりよい使い方を発見するのは、子どもたちだけではありません。先生方も、オリジナルの使い方を工夫し、どんどんアレンジして「学習の選択肢」を増やしていきたいものです。そうして、デジタル教科書を活用した、新しく、多様な、そして何よりも楽しい授業の姿を、現場から積極的に発信し、共有していくことが大切なのです。

そんなことを考えて、私もデジタル教科書と楽しく「奮闘」しながら、言いたいことを言わせてもらった全六回の連載でした。お読みいただいた皆さま、ありがとうございました。

「デジタル教科書奮闘記」は今号が最終回となります。ご愛読ありがとうございました。  
なお、本誌バックナンバーは、小社ウェブサイト内の会員専用ページ「光村コミュニティ」にて、PDF形式でダウンロードすることができます。どうぞご覧ください。(光村図書ウェブサイト > 光村コミュニティ > 中学校国語 > 広報誌「中学校国語教育相談室」)